―アカとアオの姫君―

奈美可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―アカとアオの姫君―

【Ｎコード】
Ｎ４０９９Ｅ

【作者名】
奈美可

【あらすじ】
悲しい過去を持つ二人の少女。ギャグありシリアスあり小説。

第零話（前書き）

この小説は「ＮＡＲＵＴＯ」を下敷きにして創られたファンフィクション（ＦＦ）です。

第零話

「あーおーねー！！」

現在６時。紅髪、金の瞳を持つ少女が蒼髪、赤目を持つ少女のお腹に……ダイビング。

だから当然……

「○△◎▼¥＃◆□ッッ！！！！？？？？」

何を言っているのか分らないが叫んでいる事は分かる。

一瞬泡を吹いて体が細かに動いた。が、すぐに勢いよく起きあがって先ほどの紅髪の少女に飛び掛った。

「てめェェェェッ！！！　何しとんじゃクソ野郎ォォォォォォ！！！！！！！」

アオネ、と呼ばれた少女が紅髪の少女の胸倉を掴みながら叫ぶ。

「あははは、わり♪」

「ベニカ～？　珍しく早く起きたかと思ったらもぅ……」

「だって今日はアニメの再放送！　見逃したら女が…「すたらない、すたらない」

頭をがりがりかきながらベニカと呼ばれた少女の隣を通り台所へ向かうアオネ。

「ベニカ、あんた朝飯食べた？」

「おう！　カップラーメン！」

「体悪！　ご飯と味噌汁昨日作っといたでしょ？　何で食べないわ……」

ベニカの方は見ずに言いながら炊飯器の中を覗き込む……その直後凍りついた。

「いや～昨日の夜どうも腹へっちゃって……」

目に入ったのは空っぽの炊飯器。

もう一度視線をベニカの方に移し、食洗器から包丁を取り出す。

今まで笑っていたベニカもさすがに凍りつく。

そして、アオネは躊躇うことなくベニカに包丁を投げた。

耳が裂けるほどの悲鳴があがる。この悲鳴でいったいどれ位の家の人が起きた事やら……

こうしてアオネ&ベニカの朝は始まるのです。

第一話

「おっはよ～！」

「おはよ……」

何ともテンションの高いベニカとその真逆のアオネ。

今いる場所は木の葉隠れの里の忍者学校。

この学校は一人前の忍になる為に忍者候補生が通う場所。

忍者候補生は自らの高き志、憧れ、あるいは宿命……そのいずれの理由にせよ一人前の忍びを目指し、日々鍛錬に励むのだ

「おはよ。……ねぇ、何かあったの？」

そう言って出てきたのは春野サクラ。

桃色の髪で緑色の瞳。でこが広いのが特徴……（コラコラ

……彼女がそう聞くのも無理はない。ハイテンションで現れたベニカが何故かボロッボロ。

「ん～？　まぁ……うん、なぁ？」

曖昧な返事でアオネにパス。

「……ちょっとね。まぁ気にすんな」

「そう？」

ここ、忍者学校は基本的に男子クラスと女子クラスに分かれている。野外演習などで一緒になったりもするが大抵は別々の部屋で勉強する。

だから、今この場所には男子はいない。

鞄を置いて外に抜け出そうとするベニカにアオネは静止の言葉をかけるが何の意味もなさず風のような速さで外に行ってしまったベニカ。

その場にいた女子数名が追いかけようとしたがアオネが「ほっとけばいい」と言ったのでやむおえず自分の席に戻ったのでした。

アオネは自分の席について外を見始めた。

ここからだと、火影岩が見える。

火影岩というのは歴代火影が刻まれた里の象徴。緊急時には避難場所になるらしい。

「いつ見ても大きいよなぁ……」

しばらくボォッと眺めていたが、先生が来たので視線をかえて先生の方へ向けた。

第二話

授業が始まった。あ、まだベニカは帰ってないんだけどね。

まぁいるときのほうが珍しいから先生も普通に授業してる。

……いいのかなぁ。

そんな事思いながら先生が黒板にいろいろ書いていくから、そのまんま写していく。

そういえば、明日は卒業試験か……

卒業試験で合格すればはれて下忍になれる。

不合格ならまた忍者学校に戻らなきゃならない。

――――っていう大切な日の前日なのに……

うちのベニカは何やってんのよ……

目だけ外を見る。そして、凍りつく。

「あんの馬鹿……」

目に入ったのはあの火影岩。歴代火影の顔に……凄い悪戯書きが……

そして二つの人影。

こんな事する奴この里にはあの二人しかいない。

「先生、ちょっとあの馬鹿殺してきます」

軽くやばいこと言ってあいつ等の所へ向かう。

先生が一瞬凍りついたように見えたのは……まぁ気のせいってことで。

―――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――

遅くなりましたがちょこっと登場人物紹介～♪

注意：ネタバレ含みます。かなり

鳳凰(ほうおう)ベニカ

生まれはある国のある町。生まれてすぐに研究所に入れられ、過酷な研究と修行によって元からあった血系限界をプラスして本気でやれば火影すらこえてしまうほどの実力を持つ……はずなのだが本人記憶喪失で、その頃のことは何にも覚えてない
泣き顔は殆ど見せない。いつもナルトと悪戯している問題児。そして馬鹿。でも人気は高い
漫画やアニメが大好き

青龍(せいりゅう)アオネ

生まれは研究所。人間ではない人間。ベニカと同じ実験体で、ベニカと同等の力を持つ
謎が多く、大人っぽい雰囲気を漂わせるのだがベニカやナルトなど

と一緒にいると突っ込みにまわる事が多く結果、大人っぽい雰囲気は粉々に砕け散る
ベニカやナルトの世話役でよく切れる。そして危ない事を言ったりどこからか毒薬を持ち出してきたりと危ない人
七歳のころベニカと一緒に木の葉の里に引っ越して来た

第三話

火影岩のところにいくと、もうすでに人が集まっていて三代目様の顔も伺えた

「ベニ……ナル……覚悟は出来てんでしょうね」

妖しく笑いながら三代目様のもとへ向かう。三代目様に近寄ったら驚かれたけど、今はそんなこと気にしてる場合じゃない

今は、あのばかどもに地獄を見せなくては

「おお、アオ……「すみません」

頭を下げて詫びる。もっと注意してたら多分やらなかった……いや、注意しててても同じか

とりあえず三代目様に謝る。これで何回目よ、この人に頭下げるの

「いや、ｂ「あの馬鹿は責任とって、私が殺してまいりますので」

もう一度笑う。それから三代目の次の言葉を待たずに二人のところへ行った

え？　あいつらは大丈夫かって？　平気平気。あいつら殺しても死なないもの。多分

イルカ先生の近くの手すりに飛びうつる。突然現れた私にイルカ先生も驚いたらしい

「あはは、イルカ先生。毎度毎度あの馬鹿どもがご迷惑かけます……私が責任とって殺してきますのでどうぞご安心を」

先ほど三代目に言った時と同じような言葉を並べ、同じような笑

みを浮かべる
勿論、その後のイルカ先生の言葉を聞くこともなかった
　飛び移った手すりからまたさらに飛び上がる
思いっきり息を吸い込んで、一瞬止める。そして……

「テメェラァァァァァァァッ！！！　何さらしとんじゃボケどもォォォォォォッッ！！！」

「ギャァァァァァァァアッ！！！　あ、アオネ！！！？？？」

「く、来るなってばよォォォォォォッ！！！」

　勿論来るなと言われてもこのまま勢いがとまるわけもなく
もし止まったとして私がまっさかさまに落ちちゃうから私の意思で
止まる事はありえないけど
　適当にナルトとベニカに近い所にある足場を見つけてそこに降りる
顔を青ざめさせて逃げようとしているナルトとベニカを見て、声の
トーンをおとし、一発

「逃げたら殺すよ？」

結局何かする前にイルカ先生に止められてナルトもベニカも縄に縛られ、説教を受けた

ち、つまらん

結局、罰としてベニカとナルトは居残りで火影岩の掃除させられる事になったらしい
それが終るまで待っているのもしゃくなので何かやることないかなーと思っていたら
冷蔵庫の中身がなくなっているの思い出して買出しに行く事にした

行く時にベニカが裏切りものォとかいわれたけど
明日から野菜料理フルコースにするって言ったら何も言わずにどっかに行っちゃった

ちっ

小さく舌打ちしたのはきこえただろうか。どっちでもいいけど。とりあえず、商店街に行く事にした

店がたくさん出ている。夕暮れも近くなってきて遠くが茜色に染まっているがまだまだこっちは青空
活気があって威勢のいい声が飛び交わっている

その中の店に入って必要な物をいくつか買う
今日は結構安かったからちょっと買いすぎたかも

その後本屋に入って自分の目あての本が買えたから
薄く微笑みながら一楽の傍を通って家に帰ることにした

一楽の傍を通っていくときよく知る人の楽しそうな声が聞こえてきた
その声でいっそう笑みを深くして、帰っていった

家に帰った後買ってきた物を冷蔵庫とかに入れて必要なものを取り出して一人分の料理を作る。料理は私の役目だから結構得意。別に料理やるのが好きって訳じゃないけど

今日はベニも一楽で食べてくるみたいだし、一人分で簡単なのをつくる事にした

いい匂いが台所に漂う

ベニ、今日遅くなるかな？

手際よく器に今日のご飯を盛り付けながら、そんなこと思った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4099e/

―アカとアオの姫君―

2010年10月10日16時27分発行